

REPORT

民間、行政、学校一体の地域づくり、人づくり～山形県遊佐町^{ゆざまち}

大人の本気が 地域と生徒の明日を照らす

山形県の最北端、県の形を人の横顔に例えると「おでこ」の位置に遊佐町はある。
鳥海山から湧き出る豊かな水が田畑を潤し、日本海に沈む夕日が庄内平野を染め上げる。

平成の大合併の折、隣接する酒田市へ吸収されることなく自立の道を選んだ
人口1万人強の自治体が今、地域づくりで注目を集めている。何が人を惹きつけるのか。

10代をこの町で過ごした若者の話を出発点に、関係者を取材した。

取材・文／堀水潤一



少年議会がつなぐ未来のバトン

自分の手で町は変わるという実感

国政選挙の投票率の高さで知られる山形県。なかでも遊佐町^{ゆざまち}における若年層の投票率が高い。その遠因と言われるのが2003年度に始まった「遊佐町少年議会」の存在だ。「これからの町づくりをしていくのは若者」という小野寺喜一郎 元町長の信念の下で始まった模擬議会であり、町在住・在学の中高生を対象に、立候補または選挙で選ばれた少年町長・少年議員が本格的な議会運営を行う。似た制度をもつ自治体もあるが、歴史は古く、年間45万円の予算がつくなど独自色が際立つ。半年間毎週のように活動が続き、年3回の少年議会で審議された案は実際に政策化される。例えば、町のイメージキャラクターの募集や音楽イベントの開催など。街路灯や雪よけ柵の設置など予算に収まらない要望は町の事業として実現することもある。

しかし、近年こそ立候補者が増え、23期

の累計で議員数は273人にのぼるが、長らく定員確保が課題で、2020年代に入るまで選挙になることはほとんどなかった。その過渡期に3期連続で少年町長を務めたのが齋藤愛彩^{あや}さんだ(写真下)。遊佐中学校2年生のとき初めて少年議員となり、羽黒高校(山形県鶴岡市)在学中の3年間を少年町長として過ごした。大学を卒業した現在は社会人2年目にあたる。何が彼女を突き動かしていたのだろうか。

「以前は都会に憧れ、何もない遊佐に生まれたことを不幸とさえ思っていました。でも少年議会に入り、町をPRするパンフレットを制作するため町内を巡ったところ、退屈に思っていた景色が変化し、魅力に気づいたんです。周囲の大人が子ども扱いせず、一人の人間として扱ってくれたことも嬉しく、活動にのめりこんでいました」

そして数々の政策を実行する。1時間に1本の電車を待つ高校生が邪魔にならないようホームにベンチを設置したり、町立図書館に、会話をしながら学習できるスタディスペースを設置したり。後者のきっかけは少年議会の視察にきた社会起業家と話すなかでユースセンター(中高生のための第三の居場所)の概念



年3回開催される少年議会には、遊佐町長、副町長、教育長、および各課長が出席。写真は、第23期の第三回少年議会の様子(遊佐町提供)。



古窯ホールディングス
元遊佐町少年町長
齋藤愛彩^{あや}さん

(右)鳥海山の伏流水で満たされた「丸池様」。エメラルドグリーンの水面を鬱蒼とした樹木が覆い神秘的。(左)町内のあちこちにある湧水スポット。



を知り、必要性を痛感したことだ。とはいえ大掛かりなことはできない。そこで、生涯学習センターに試験期間限定の自習場所を設け、ニーズがあることを実証したのち、図書館での常設につなげた。こうした活動を通じ彼女は「自分たちの町は、自分たちの手で変えられる」という実感を得る。

JRへのダイヤ改正の要望など、実現しなかった政策もあるが、役場の担当者は背中を押し続けた。だからか、思ったことを即行動に移す習慣がついた。コロナ禍、高校が休校になった際、少年議会とシビックプライドの関係を論文にしようと思い立った際は、制度の生みの親である小野寺喜一郎元町長に電話をかけヒアリングをした。

「祖母が知り合いらしく、『喜一郎さん、孫の愛彩です』と連絡をしたら、喜んで創設時の思いを語ってくれました」

こうした濃密なつながりや、名前で呼び合える距離感こそ、この町がもつ大切な資産だろう。この後に登場する人物の多くも、実は恩師と教え子だったり、あるときは助け、あるときは支えられる関係だったり、幾重にも重なる縁で結ばれている。

地域みらい留学制度の始動

齋藤愛彩さんが少年議会の活動を始めたころ、町唯一の高校、山形県立遊佐高校では定員割れが深刻化。そこで、小野寺元町長の任期満了後、強いリーダーシップを発揮

Point of View ①

町・行政の想い



大人の世界に触れながら成長

遊佐町教育委員会
教育長
土門 敦さん

少年議会やデュアル実践を通して、自分で課題を見つけ解決するプロセスを経験することは、社会に出てから財産になるはず。大人の世界に触れながら成長していける環境を町として提供し続け、発展させていきたいです。町内に5校あった小学校は2023年4月、1つに統合しました。これで町内の小中高は1校ずつになり、より一層の連携がしやすくなりました。県外生の受け入れは、町民や小中学生の刺激となり、今後も町に活力をもたらしてくれるものと期待しています。



受け継がれてきた主権者教育

遊佐町長
松永裕美さん

この町には小さな自治体ならではの濃密なコミュニティがあります。また、大人への忖度なしにやりたいことを突きつめる中高生のエネルギーで満ちています。その象徴が少年議会。先々代の町長の時代から連綿と受け継がれてきた町の主権者教育の根幹です。議場が大人だけのものではなく、未来を担う若者の本音が飛び交う言論の場となっている光景は、まるで遊佐のパワースポット。遊佐町は、失敗を恐れず挑戦する若者を応援し続ける町です。



していた時田博機 前町長が決断したのが「遊佐町自然体験型留学生制度」の導入だ。各地で広がっていた地域・教育魅力化(高校魅力化)における国内留学のプラットフォーム、いわゆる「地域みらい留学」のことで、県外出身の生徒が親元を離れ、町の支援の下、遊佐高校に通う制度である。

時田前町長から相談され、遊佐高校魅力化プロジェクトの中心人物になるのが、当時20代半ばの藤川かん奈さん(写真左上)だ。京都で多世代が集う地域コミュニティを運営した後、遊佐へ移住。地域おこし協力隊として生涯学習に関わる傍ら、アパレルブランドを立ち上げた起業家でもある。「廃校阻止のために力を貸してほしいと言われたけど、どうしよう」とSNSに投稿したところ、親交のあった山形大学出身の二人から、「絶対やるべき」という前向きな反応があがった。一人は、東京のIT企業を経て庄内地方に戻り起業直後だった伊藤大貴さん(写真左下)。もう一人は、数学教師を目指すも教育との関わり方を模索していた鈴木晴也さん(写真39ページ右)だ。たまたま人生の節目にいた二人は、自分たちも協力したいと、導かれるように遊佐に集結した。

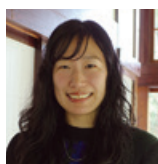
一方、高校側のキーパーソンが、当時教務主任で今は教頭を務める近藤信司先生(写真35ページ左)だ。演劇経験を活かし、中学生向けの説明会で表現豊かに場を和ませたり、文化が異なる学校と外部人材の橋渡しをしたり。中学生にインパクトを与えたのが2019年夏に開催された2泊3日の体験プログラムだ。鳥海山や日本海を舞台に、藤川かん奈さんら大人が遊ぶように働く姿に、中学生の心は動いた。そして、関係者の予想を上回る5人が入学を決める。こうして、廃校の危機にあった高校は、選ばれる学校へ転換する一歩を踏み出した。

少年議会に吹いた新しい風

2020年3月、空き家を改装した寮に、5人の1期生が引っ越してきた。そこに、噂を聞きつけた2学年上の地元の高校生が訪れる。当時3期目の少年町長を目指していた、あの齋藤愛彩さんだ。

「遊佐の人間とは違う視点をもっているだろう県外生に、絶対に少年議会に入ってもらいたい、と直談判に行ったんです」

その熱意に押され、安藤希祥さん(写真右上)、小川萌衣さん(写真右下)ら3人が、第



合同会社Oriori 代表
一般社団法人
遊ばざるもの学べからず 代表理事
藤川かん奈さん



東北公益文科大学4年
元遊佐町少年副町長
安藤希祥さん



合同会社dano 代表
一般社団法人
遊ばざるもの学べからず 理事
伊藤大貴さん



東北公益文科大学4年
元遊佐町少年議員
小川萌衣さん

18期少年議会のメンバーに加わった。ただ、アクティブな小川萌衣さん(後に、学校の敷地に畑を作ろうと画策し、地域の人を巻き込み重機を運び込む騒動を起こす)をはじめとした少年議員15人と比べ、安藤希祥さんは声も細く、消極的であった。

「何かしたいとは思いつつ、ひきこもるために遊佐に来たようなところもありました。見学に来たときも、寮の個室の様子とWi-Fiのスピードを確認することが最大の目的でしたし(笑)」と安藤さんは振り返る。

齋藤愛彩さんは、そんな彼を敢えて少年副町長に指名した。

「お節介な性格上放っておけなくて、意図的に役割を振ったり、発言を促すなど、当事者意識を引き出すようにしていました」

彼女のエネルギーを体いっぱい吸収したと、また、県外生の寮暮らしをサポートするハウスマスター(当時、鈴木晴也さん)と、深夜のキッチンで腹を割って話したことなどで、彼の心は開かれていく。後に、3期連続の少年副町長、さらに遊佐高校の生徒会長も務めることになることは、まだ本人さえ想像できていない。

遊佐高校魅力化推進計画の策定

試行錯誤が続いていた遊佐高校の魅力化も、2023年ごろになると、多様な人や組織が噛み合い回転し始める。当初教育委員会主管だったプロジェクトが、町長部局の企画課に移ったタイミングで「遊佐高校魅力化推進

計画」が策定され、町としての県立高校支援を明確化。また、2023年度に鈴木晴也さんが、翌年度には加えて下村俊太郎さん(写真39ページ左)が教育コーディネーターとして正式採用されたことで、遊佐高校における探究やデュアル実践(後述)など独自のカリキュラムも進化し始める。

さらに、2024年10月には、藤川かん奈さんが代表を務める一般社団法人「遊ばざるもの学べからず」が設立。町教委、企画課、産業課の枠を超え、若者を軸とする人材育成施策を受託。高校魅力化起点での町づくりも始まった。

依然として少子化は進むものの、今も遊佐高校は年5人ほどの県外生を迎えている。2022年度から遊佐高校の魅力化推進を担当している企画課の瀧口めぐみさん(写真下)は話す。

「当初、高校生がこんな遠いところまで来てくれるなんて信じられませんでした。空の広さや満天の星空、食材のおいしさに感動する姿を見て、当たり前で気づかなかった遊佐の良さを教わりました。役場の立場としては定住につながるといいのですが、個人的には進学や就職で町外に出たとしても、何らかの形で接点を持ち続ける関係人口になっていただければ嬉しいです」



遊佐町役場
企画課 主任
瀧口めぐみさん

Point of View ②

山形県立遊佐高校の想い



地域の方々が出入りする開かれた学校

【池田貴之 校長】今年度本校の校長に着任して、まず感じたのは、教職員ではない多くの方々が頻繁に出入りしていることでした。職員室には、2名の教育コーディネーターの席が配置され、「観光ビジネス」や「ジオパーク探究」といった授業には、専門性を備えた地域おこし協力隊の方たちが協力してくれています。同授業を担当する商業科の後藤正樹先生も、「若い人、外部の人ならではの発想に気づきもらっている」と話しています。先日、生徒に誘われて校外学習についていったところ、教員と外部人材を合わせた大人の数が、生徒とほぼ同数だったのには驚きました。

役場や商工会の方々、民間の事業所を含め、こうした

外部人材との良好な関係は、県のモデルケースとして紹介されることもある本校の特色ある学校運営の柱です。長年にわたって築かれてきたこの関係を大切に育てていくことが私に課せられた役割だと認識しています。

【近藤信司 教頭】酒田市出身の私は、高校時代は山岳部で鳥海山に登り続けてきました。しばらく県の内陸部に住んでいましたが、遊佐高校勤務の辞令が出て、20年ぶりに鳥海山が見えるこの地に戻ってきたときはハンドルを握る手が震えたほどです。本校の魅力は、一人ひとりの表情が見えること。「あの生徒は、うちの学年じゃないから関係ない」とは決してなりません。人懐っこい生徒たちに囲まれ、毎日を過ごす幸せを噛み締めています。

昨年卒業した県外留学生が、報告会で遊佐の思い出や感謝の言葉を述べた際、一様に「最初のころはホームシックで泣いてばかりだった」と話していました。学校では活発で、そんな気配は感じなかった生徒たちです。人知れず辛い思いもしながら地域の人に支えられがんばっていたことを思うと目頭が熱くなりました。地元の生徒も、そんな県外生を見て、自分たちも成長しなきゃと刺激を受けています。



左から、近藤信司教頭、池田貴之校長、後藤正樹先生。(撮影／米屋健吾)

\ Student's Voice /

「デュアル実践」を経験して得たこと

「事業所の方からは、仕事の幅や奥深さを教えていただきましたし、遊佐で一緒に働く仲間を増やしたいというお気持ちがあることを知りました。本業のお仕事を遅らせてまで対応していただき感謝しています」(石垣風卓さん@ゆざ食彩工房)。「自然が好きで観光の仕事を選択しました。飛行機の予約などの手続き業務ができたのは貴重な経験になりました。PRポスター制

作では自分のイメージを形にでき達成感を得ることができました」(森岡皇士郎さん@遊佐鳥海観光協会)。「お客さまに無料でハンドマッサージをする技術面と、どうPRすれば商品を買いたいと思ってもらえるかという販売面の課題の両立に悩みました。仕事は自分で作るもの、という教えも印象に残っています」(松本杏彩さん@ボディケアサロンCanana)



石垣風卓さん (3年)



森岡皇士郎さん (3年)



松本杏彩さん (3年)

「デュアル実践」10年の実績と課題

地域を教室に変える大人たち

地域みらい留学が注目されるが、遊佐高校の改革は以前から始まっていた。普通科から、教養系列・地域共生系列をもつ総合学科へ改編した2015年度の翌年には、実践型長期インターンシップ「デュアル実践」がスタート。地域共生系列の2年生が半年間、毎週水曜の終日、町内各地の事業所で実習を行う。近い将来の自分たちのキャリアを描く貴重な時間だ。

取組の土台を築いたのは、商工会と役場の産業課だ。前例のない長期実習に困惑する事業所を一軒ずつ回り、協力を求めた。現在、産業課で同事業を担当する伊藤正美さん(写真下)は苦労や意義を語る。

「産業課としては、単なる職場体験ではなく、人材確保や地域貢献につながることを期待して事業所に協力をお願いしています。役場も事業所の一つとして生徒さんを受け入れますが、福祉や教育など多岐にわたる部署の業務を経験してもらうことで、『役場が自分たちの生活に、これほど関わっているとは知らなかった』という声ももらいます」

協力事業所にもそれぞれ、高校生を受け



(上)デュアル実践翌日のリフレクション会の様子。担当は教育コーディネーターの下村俊太郎さん。(中)田植えを手伝う教育コーディネーターの鈴木晴也さんたち。(下)中高生のサードプレイス、遊佐駅前の「おでこBASE」にて。



遊佐町産業課
産業創造係
係長
伊藤正美さん

入れる明確な理由がある。ボディケアサロン Cananaを営む^ね津^つ香奈さんは、生徒を“一人の経営者”として扱う。「雇用されるだけが仕事ではなく、自分次第で仕事は生み出せる」という起業家精神を学んでほしいからだ。また、遊佐企画の遊佐亮太さんは、空き家を再生した宿泊施設の開業準備を進めており、そこを実習の舞台とした。町議としても関心を

もつ空き家問題を若い世代と考えたいからだ（詳細は下段）。

リフレクション会と成果発表会

実習翌日の木曜放課後には、教育コーディネーター主導のリフレクション会が行われる。グループワークを通じて「何が起き、どう感じたか」を語り合い、体験の言語化を促す取組

Point of View ③

デュアル実践協力事業所の想い



ボディケアサロン Canana
代表
^ね津^つ香奈さん

デュアル実践の受け入れは今年で4年目。地元の子もいれば県外生もいるし、性格も一人ひとり違います。接客が苦手な子には、技術習得で自信をもたせるなど、その子の特性や長所を活かす工夫をしています。私自身、教え方や接し方を学ぶ機会になっていますし、毎回「もっとこうすればよかった」という反省や発見があります。よく、地方には仕事がないと言われますが、どこに住んでいても「自分の腕次第で仕事は生み出せる」という選択肢があることを、ここでの実習を通じて高校生に知ってほしいです。



受け入れ初年度に^ね津^つさんが作成した綿密な計画書。



日本海運輸
^しのや
^へ谷^や 浩さん(右)
^へ谷^や 春樹さん(左)

当社は運送業ですが、高校生に運転はさせられないため、タイヤの交換やホイールの塗装、洗車などを通じ仕事に対する責任や誇りを伝えています。トラックを美しく保つのはお客さまに安心を与えるのと同時に、ドライバー自身の自覚を促すため。生徒1人に2人のスタッフが付くこともあり負担は少なくありません。協力を始めた11年前は「採用につながれば」という思いもありましたが、今までそれはかなわずです。それでも続けるのは、若い世代の感覚に触れられるから。遊佐で育ち、遊佐で商売を始め、遊佐の道を使わせてもらっている以上、道を掃除するのと一緒に、恩返し的心で協力しています。



遊佐企画
代表取締役
^ゆさ
亮太さん

遊佐町には約4800世帯に対して昨年末時点で600軒以上の空き家があります。この深刻な問題を考えるため、自ら空き家を再生し、宿泊施設として開業する準備をしています。残置物の処理など想像以上の出費や労力がかかりますが、貴重な経験です。実習に協力したのは、この問題を私1人でどうにかするのではなく若者と考えたから。期待しているのは、遊佐高校に「空き家リノベ部」ができること。社会課題の解決に高校生が関わり、町の活性化につながるような理想を思い描いています。



遊佐町立図書館
館長
齋藤守敏さん

県外生を含む高校生を受け入れる際、大切にしているのは、遊佐に馴染んでもらいたいということ。図書館の業務そのものよりも、町民との接し方を学んでほしいし、町そのものを好きになってほしい。私自身遊佐で生まれ育ちましたが、県外勤務や単身赴任も経験した分、この町の良さを認識していますから。そのため、図書館内に留まらず、まちづくりセンターという町内6地区の拠点など、普段は足を踏み入れないエリアにも生徒を連れ出しています。

だ。他者の視点に触れることで自身を客観視し、次週に向けた意欲を育む。9月末に開催される成果発表会はその集大成だ。ポスターセッション形式で、仕事の内容だけでなく、半年間を通じた心の葛藤や変化をグラフにしながら自分の言葉で実習を振り返る。近藤信司教頭は、こう話す。

「地域みらい留学の1期生と関わったあと、私は一度遊佐高校を去り、教頭として戻ってきたのですが、リフレクションを充実させたことで成果発表会のレベルが格段に上がったことを感じます。半年間の実習中に生じた『今回はがんばれた』『今日は辛かった』という感情の上がり下がり言語化しておくことで、半年後の発表にも気持ちがこもり、生き生きと伝わるんです」

発表会には、事業所、保護者、教育関係者に加え、遊佐中学校(石黒 久校長)の3年生約100人がバスをチャーターして見学にくる。こうした交流は、一時期落ちこんでいた地元中学校から遊佐高校への進学率が回復する契機になっている。また、実習先に就職する例もあるなど、生徒の地元でのキャリア実現にもつながっている。

ただし課題もある。行政には予算や公益性、学校には教育課程やリスク管理、民間には本業との兼ね合いなどの事情があり、切

り取る箇所によっては濃淡も生じる。

それに対して、事業所と学校のパイプ役を自認する地域おこし協力隊の松尾尚記さん(写真右下)は次のように話す。

「立場によってズレが生じるのはごく自然なこと。直接は言いにくい本音を拾い上げ、遊佐の若者を育てるという共通の目的に向けて対話を重ね、調整していくのが私の仕事です。私自身、町の方針とすべての考え方が完全に一致しているわけではないかもしれませんが、けれど、異なる考え方をもつ大人が、それぞれの立場で関わることも、生徒のキャリア観を広げることになると思います」

課題感について、藤川かん奈さんも話す。

「今の遊佐は、自然や食や人や教育資源に恵まれた豊かな町です。だけど豊かさは放っておいて続くものではありません。現状に満足してはいつかダメになってしまう。課題意識をもって動き続けることが、本当の郷土愛なのだと思います」



最後に、本稿前半に登場した3人の高校生の現在地を記しておこう。

地域みらい留学1期生の小川萌衣さんは現在、遊佐から通える東北公益文科大学の4年生。藤川かん奈さんの会社のインターンを務めながら、全国の中高生に自身の体験を



遊佐中学校
校長
石黒 久さん



地域おこし協力隊
な お き
松尾尚記さん

発信したり、地域みらい留学制度のPRを行っている。八面六臂の活躍ぶりで、企画課の瀧口めぐみさんや遊佐高校の近藤信司教頭ほか、地域の人たちの信頼も厚い。

同じ大学に進学した安藤希祥さんは、遊佐駅前の空き物件を改装した中高生のためのサードプレイス「おでこBASE」を運営している。カウンター越しに接客する彼から声の小ささは感じない。大学卒業後は遊佐を離れることも検討中。成長するためには、居心地が良くなってきたこの場所を一度飛び出す必要を感じているからだ。

元少年町長の齋藤愛彩さんは、こうした後輩の活躍を頼もしそうに見つめる。

「私が遊佐で作りたいかったことの一つ、中高生の居場所=ユースセンターは、若者が主体的に運営するという理想的な形で安藤君たちが実現してくれました。遊佐高校を中心に、積極的な若者も増えています。だから私が遊佐にいる必要もないんです」

そう語る彼女は昨年、東北芸術工科大学を卒業し、県内の大手観光グループに就職した。入社2年目に向けた上司との面談では温めていた新規事業を提案。県内の高校を対象に探究学習を支援する「まちの探究ラボ」という事業だ。プロジェクトリーダーとなった今年度は、内陸にある本社と、この事業のために彼女の地元を設置されたサテライトオフィスとの二拠点での働きを両立している。齋藤さんにとって、「地域で働く」とは、一つの自治体に留まることではない。

「遊佐は、中高時代の私に『自分が暮らす地域にとって、自分は意味のある存在なんだ』という感覚を育んでくれました。だから今、どこで働いていても自分は活躍できるし、発言権があると思っています」

そして、「将来、必ず町長として遊佐に戻ってきます」と宣言する。自分の手で社会は変えられるという感触を得た24歳の若者にとって、遠い未来の夢ではない。

Point of View ④

コーディネーターの想い



誰もが教育の担い手になれるはず

教育コーディネーター
下村俊太郎さん

東京で6年高校教員をしていましたが、「違う形で教育に携わりたい」「自分の力ではコントロールしがたい自然の中で暮らしたい」という思いから2024年に移住しました。現在、教育コーディネーターとして遊佐高校の探究の充実などに関わっています。また、趣味のイラストや漫画で遊佐の魅力を発信しています。生徒には、教師ではない大人が当たり前のように学校にいる景色を通して、地域にはいろいろな人がいることを感じてほしいです。



遊佐を安心して挑戦できる場に

教育コーディネーター
一般社団法人 遊ばざるもの学ぶべからず 理事
鈴木晴也さん

高校数学の免許を取得したものの、教員ではない教育との関わり方もあるのではと考え、大学院を中退し遊佐にきました。地域おこし協力隊として3年間、県外生の寮での暮らしに寄り添い、2023年度からは遊佐高校の職員室に席をいただき、教育コーディネーターを務めています。この町でつくりたいのは、居心地の良いコンフォートゾーンではなく、安心して外の世界に挑戦でき、けれどいつでも帰ってこられるセキュアベース（安全基地）です。